

第8回 町田市最終処分場周辺環境保全協議会の議事要旨

開催日時：2012年4月11日(水) 15:00～17:00

開催場所：町田リサイクル文化センター 2階研修室

参加者：(委員) 高橋 清人[会長], 関口 孝夫, 新井 堅司, 深谷 修司,
丸山 清吉, 藤田 克彦, 萩原 牧子
(アドバイザー) 梶山 正三, 関口 鉄夫 (敬称略)
(事務局) 環境資源部長、施設建設担当部長、
循環型施設整備課職員、資源循環課職員
(傍聴者) 10名

主な議事内容を以下に示す。

1. 開会 (環境資源部長)

- ・エコまちだの紹介
- ・組織改正の報告および各課業務内容の紹介

2. 資料確認・進行説明

3. 報告・協議事項

(1) 対策工事経過報告について (事務局説明)

【2011年度中に実施した対策工事】

①管理道路の整備・補修 ②峠谷覆土工事 ③調整池浚渫

2011年4～5月にかけて、前年度工事の残りである処分場の管理用道路の整備を行った。また、覆土の付帯工事として峠谷に雨水集排水柵を設置し、他に、池の辺浸出水の流量計を設置した。5～6月に池の辺の処分場に土を搬入し、その後、夏期に埃が散らないようにするためクローバーと芝(3種類)、全4種混合の種子吹き付けを行った。その後、北里大学病院の駐車場に使っていた土地の土がローム土であることが分かり、11～12月にかけて、その土を最終覆土として峠谷に搬入した。搬入した覆土の量は、一応4,600m³と聞いていたが、土量計算をし直したところ、1万m³は搬入されていたと考えられる。覆土の高さが上がったことにもとない、ガス抜き管の高さも2m上げた。2～3月には、夏(8月26日)に豪雨があったときの災害箇所の補修工事と合わせて、覆土の工事を行い、調整池の浚渫も行った。この調整池は三段になっており、最上段の約45m³分、深さにすると約20cm分浚渫した。豪雨による道路の土砂の流れ込みがあったので、砂が入りこんでいたことが確認された。浚渫土は、吸引車両で吸い上げたものを排水浄化センターのマンホールに投入し処理をした。この他に、調整池の周りの壊れたブロックと目地の補修を行なった。その際、ブロックをはずしたところ、コンクリート基礎がない山砂に乗っているだけの状態であったので、補修箇所にはコンクリート基礎を打って積み直しをした。

【豪雨(8月26日)による被害】

- ①管理道路の陥没
- ②法面は、吹き付けた種子が剥がれ落ちた
- ③池の辺の雨水排水管(U字溝)の下に水が潜り込んで管の一部が浮上
- ④峠谷でもコルゲート管(仮設)の下に水が入って一部管が浮上

【被害への対応】

大雨後、職員が補修を行ない、種子吹き付けが剥がれた法面は、藁芝（種子が入った藁のシート。土に戻る繊維が使われている。）を法面に張り付け、現在、種子は根付いている状態である。また、峠谷の浮き上がったコルゲート管については、一度外し、下地を碎石で詰め直してから管を設置した。他に、業者に委託して補修したもので、池の辺の排水管の浮き上がりは、端の方では土が少なかったため、水が排水管へ流れ込むことができなかったことが原因と考えられたので、峠谷と同じように排水管をはずし、据え直しをして、雨水が管に流れ込む高さまで土を入れ直した。また、（管理）道路わきの埋め戻しについて、覆土を入れ、アスファルトの引き直しなど補修を行なった。（合計3箇所）

次に、大雨のパトロール中に確認したのだが、旧埋立地には雨水排水路は在るが、流下方向の一部がくぼんだ状態になって水が溜まっていたので、柵を設置し、排水路に流れ込むように整備した。もう1箇所、三角地（駐車場）から峠谷に下りる門の手前に、雨水調整池に流れ込むバイパス管を設置した。

- 1) 調整池の法面崩落について、背後が山砂との説明があったが、写真を見た限り礫のような感じがしたので盛土ではないのかと考えられる。地山を切って造成されたものと考えていたが、そうではなく多くの礫を含む土砂を盛土して造成したため、土が水を含んで崩れたのではないか。（関口先生）
 - ⇒ 補修工事を行った際の写真を見る限り、山砂で特に礫という印象は残っていない。設計図面上では下地の整備として砂が入っている。今回の補修では、ブロックを外して、ブロック裏の土質について確認する予定である。（事務局）
 - ⇒ 人工の盛土であれば、それを除去しない限り水が入り続ける。確認をお願いしたい。一番の原因を除去するような対策が必要である。（関口先生）

- 2) 峠谷の最終覆土の状況について、かなりあちこちでの崩落が見られるため、転圧・敷きならし状況が非常に悪い気がする。盛り上げ型の場合は、最後の転圧・敷きならしだけでは足りない。滋賀県のRD最終処分場でも、一番上はキャッピング（水を浸透させない施工。）と、法面はベントナイト混合土を使い、浸透係数を調節しながら、最終的な混合比率を決めて締め固めを行う計画である。峠谷の最終覆土についてはロードローラーをかけたわけでもなく、法面勾配についても2mにしては少しきつ過ぎるのではないかということで、転圧・敷き均しが不足しているのではないか。盛り上げ型で最終的に締め固めを行うのであれば、もう少し慎重な施工が必要ではないかと思う。（梶山先生）
 - ⇒ 法面のクラック幅が1~2m程度の箇所があり、大きく崩れるような予兆が見受けられる。前述のご指摘通り、キャッピングは必要である。また、峠谷の小堰堤の両側で水が出ている箇所があり、中に浸透して溜まった水が横に出てきている現象が見られるので、その点も注意いただければと思う。（関口先生）
 - ⇒ 最終覆土について赤土という設定は、今までの協議の中でご指摘いただいたもので対応しており、想定より若干多く入っているところもある。4月の集中豪雨で悪い部分が逆に露呈したと考えている。転圧方法につ

- いては、ブルの敷き均し、ユンボの押さえというような形なので、ご指摘のとおり転圧不足ということでは否めない。通常の土であれば、降雨により締固めされることもあるが、赤土のため逆にそれほど効果は出てこないと考えられる。少なくとも法面箇所については工夫しないと、今後の豪雨で再び崩れてしまう恐れもある。浸透率の確認という点についても、工法的に検討する必要があると考えている。(環境資源部長)
- ⇒ 浸透係数をまずきちんと測って、現状を分析するところから入りたいと思う。対応策で一番コストがかかるので、経費、結果を踏まえて検討したい。少し時間をいただきたい。(施設建設担当部長)
- 3) 補修箇所(池辺から峠谷に流れる箇所)の流末について、上で水をコントロールすると下へどんどん流れていくので、側溝にしっかり水が入っているか確認する意味で、途中に集水枡を設ける必要があると思う。もともと水が多く集中する場所なので、この周辺の水処理についても、再度検討していただきたい。(関口先生)
- ⇒ 水はどこか1箇所で止めればどこかへ流れるということをご指摘の通りである。今回の補修箇所についてはそれが顕著に出ている場所なので、きちんと排水できるような枡で受けて、コルゲート管へ誘導するような対策も考えさせていただきたい。ただ、昨今、想定外の雨が降ることが多分にあるので、我々も考えられることはやっていきたいと考えている。(環境資源部長)
- 4) 峠谷の覆土は、今回が最終覆土と考えてよいか。そうすると、峠谷に仮設管として設置しているコルゲート管は、最終的には池の辺と同じようなU字側溝にする予定なのか。(梶山先生)
- ⇒ あのコルゲート管は永久的な排水設備であるかどうかについては疑問を持っており、暫定的なものではないかと考えているが、費用的な問題があるので当面は現状のまま様子を見る計画である。池の辺と同じような対策がよいかどうかは考えるところはあるが、最終的には半恒久的な対応をしないと水処理はできないと思っている。(環境資源部長)
- 5) 池の辺の「かど」のU字側溝について、崩落の可能性は以前からも指摘していた。ここは、えぐったのではなく、水がU字溝の横に溢れ乗り越えて、上から出る時に削った状態である。ここに鋭角的に角度を付けているということに問題がある。U字溝の下は、廃棄物(ごみ)層であるため、崩落する原因を取り除くような対策を考えた方がよい。角の手前でバイパスにして調整地のほうへ落とすほうがいいのではないかと。雨が降ったときに再度確認してもらいたい。(委員)
- ⇒ 今回のU字溝の浮上はU字溝周辺一帯の地盤が低く、表面水がU字溝に落ちなかったことが原因と想定して、表面水がU字溝に落ちるように土を盛りました。ご指摘のようなU字溝の鋭角な部分で処理しきれない水が溢れているかは、今度雨天時に確認します。(事務局)
- 6) 峠谷の最終覆土の上に芝か何かを植える予定はあるのか。あるいは、現状のまま雑草が生えるのを待つのか。(委員長)
- ⇒ まずは浸透係数を確認してから、分析結果をふまえた内容について協議会等でお謀りし、先ほど先生が言われたベントナイト混合土法や種子の吹き付けや、転圧をもう1回やり直すとかご意見を伺い、予算化をしな

がら方策を考えたい。(施設建設担当部長)

- 7) 浸透係数について、浸透したほうがいいのか、しないほうがいいのか。浸透しない方がいいとは思いますが。(委員長)
- ⇒ 全く浸透しないようにするのはまずい。埋立地の安定化のためには水がある程度入るようにするのが最終処分場を閉鎖するときの技術的な方法である。どの程度の水を入れるのか、ベントナイト混合土で雨水の浸透量を調節して浸透しない水は下流域へ流すため、上をキャッピングした場合、下流への流出が増えるので、例えば30年確率くらいの大雨で、どの程度の規模の防災調整池が必要になるのかなど、検討した上で全体の施工を考えるべきである。(梶山先生)
- 8) 浸透係数はどのように測定するのか。(委員長)
- ⇒ 実際搬入した土を使って、締固め試験を行ない、供試体(測定する試料)を作成し、1検体実施している。後ほど調査結果のほうで説明する。(コンサルタント)
- 9) 町田市の最終処分場には関係ないので仮定の話だが、谷戸池公園の中の芝生が全部剥がれて完全に赤土になって放置されたところがあった。その上に芝生が生えてきて、ほぼ3分の1くらい成功している。ただ、胤では無くて芝生である。使ったのは、野津田公園の芝生をはがした時のものを持ってきて使った。あれくらいの公園は必ず芝を張り替えるから、その時に公園の人(担当部署)と話して、もらうことを考えた方がいい。池の辺表面の植生について、現在は雑草も生えてこないような状況である。このままではダメなので、他の場所で新しく張り替える時の古い芝生をはがして直接張り替える等の対策が必要である。そのような対策が2年後ぐらいに必要になると思う。(委員)
- ⇒ 協議会でのご意見ということでお聞きした。(委員長)

(2) 調査概要について (コンサルタント)

【説明資料を参照】

- ・最終処分場の調査する試料名、調査位置とその場所を調査する目的の説明。
- ・最終処分場の調査経過、2012年度の調査計画等を説明
- ・旧埋立地内に連続測定機器を新たに設置し、旧埋立地の調査を増やす予定。

(3) モニタリング調査結果について (コンサルタント)

【調査結果資料集を参照】

(抜粋)

※13 頁、浸出水・周辺モニタリング井戸のイオンバランス(ヘキサダイアグラム)。平成20年は覆土工事前、平成23年は工事完了後の調査。

比較すると、カルシウムイオンの割合が減り、一方、マグネシウムイオンが若干増えておりイオンバランスが変わっている傾向が見られるが、原因は不明。今年の結果を見て、ご報告する。

※16 頁、地下水の水位の連続測定データ。MBNo.6は、雨量の多いときに水位が大きく上がっている。これまでの調査結果から、MBNo.6は地下水の流れで上流側に位置していることがわかっており、法面の上にあることから変動が大きいと考えられる。

※21 頁、峠谷の覆土は透水係数 10^{-7} で、透水性の低い材料である。

※24 頁、池の辺の覆土工事が終了し、覆土効果によって、池の辺埋立区の浸出水量の水量が減るかどうかが 2011 年 6 月に流量計を設置して調査した。なお、覆土工事前の流量は、手でバケツに採水して実施（池の辺浸出水量をマンホールでバケツに受け、採水した量と時間で浸出水量を算出）しているの、厳密に言うと精度に違いはあるものの、雨が降れば浸出水量が増える傾向は変わらなかった。また覆土効果によって、『雨量が浸透して浸出水として出てくる時間が遅れる』などの変化も見られなかった。

また、浸出係数（池の辺埋立区内に降った雨量^{***}に対し、池の辺浸出水量がどのくらいかを調査して算出）は、工事前後で変化が見られず、覆土による浸出水量の削減効果は見られなかった。

^{***}雨量は、排水浄化センター敷地内に設置している雨量計のデータを採用した。

1) 測定機器

pH計や流量計などの校正はされているものと思うが、その結果は明確にされているか。校正メーカーでやっているのか。計器そのものの精度は出ているのか。（特に、モニタリング井戸MBNo.9 の連続測定機（pH計）のデータが、設置後下がる傾向があることに対してのご質問^{***}）（委員）

⇒ 測定する試料を持ち帰っての分析は、校正した機器で測定している。連続測定については、毎月、標準液等を使用して校正しており、基本的には問題ないと考えている。（事務局・コンサルタント）

^{***}MBNo.9 の連続測定機について、pH計の値が低下する傾向が続いているため、一部の部品を取り寄せ、交換して経過を観察する。

2) 池の辺浸出水量の流量計（平成 23 年 6 月に設置）

超音波ドップラー型はかなり誤差が大きいものと考えているが、どのように確認しているのか。（梶山先生）

⇒ 設置後、回収しての校正はしていないので、確認方法については後日先生と相談させてほしい。（事務局）

3) 本年度の結果と評価

視点 3 の「埋立地内部は嫌気的な雰囲気が強まったことは示していない」とあるが、嫌気的な雰囲気が強まると、埋立地内部ではどうなっているということを意味するのか。（委員長）

⇒ 嫌気的というのは空気が送られられない状態で分解が進み、硫化水素やメタン等の有害ガスの発生が増えることになる。それに伴い、浸出水も電気伝導度が上がることがある。池の辺埋立区等では、ガス抜き管を設置し、好気的な環境を保つようにしている。嫌気的な状況よりは好気的な状況にしたほうが、硫化水素等の有害ガスの発生が少ない。（コンサルタント）

⇒ メタン等が発生するという事は、有機物が分解するわけだから、逆に出た方が、埋立地の安定化が進んでいるということにならないのか。（委員長）

⇒ たしかに安定化に向かうために分解は必要だが、嫌気状態であれば有害ガスが発生する。逆に好気的な分解であれば、有害ガスの発生が少ないため、好気的な環境で分解促進させるほうがよい。（コンサルタント）

- 4) 平成 24 年度モニタリング計画 (案)
旧埋立地の発生ガスの項目はガス量等：年 4 回、ガス濃度：年 1 回測定とあるが、問題となっているベンゼンは測定項目に含まれているのか。
(委員長)
- ⇒ TVOC (揮発性有機化合物) の項目に含まれている。(コンサルタント)
- ⇒ もう少し素人にもわかるような書き方をさせていただくとありがたいと思う。(委員長)
- 5) 埋立ガスのベンゼン濃度について
MB No. 18 のベンゼン濃度が、異様に高い結果 (200ppm) であるが、これはどういうことなのか、心配はないのかという視点で説明してほしい。
(委員)
- ⇒ 平成 23 年度の新規掘削孔であるので、まだ経過を観察しているところではあり、同様に MB No. 17 も平成 22 年度に 110ppm という高い結果が出ている。濃度は高く、これを直接、吸い込むと危険なものになるが、ガスの発生量自体は多くはなく、また、モニタリング井戸には蓋をしているため外気に直接流れ出していないので人体に即危険があるような状態のものではないと考えている。(コンサルタント)
- ⇒ 外気に流れ出ないということは確実なことなのか。環境調査は必要ではないのか。(委員)
- ⇒ 旧埋立地の斜面で廃棄物が露出している箇所については、ガスが流れ出ている可能性はある。(関口先生)
- ⇒ ガスが抜け出ていることは確実なので、問題は、濃度と量である。環境測定という形で、一度は測定してみる必要があると思う。環境測定は、24 時間連続吸引して測定する方法がある。環境への影響は、発生ガス量からみると、おそらく非常に小さくなっているとは思いますが、チェックする必要はあると思う。旧埋立地のごみが露出している部分や MB No. 18 (ふたをあけて) などについては一度測定してみたらどうか。(梶山先生)
- 6) 覆土の効果について
今回一番気になったのは、覆土の効果だが、覆土は何のためにやるのかと言うと浸出水量の低減であり、完全に浸出水をゼロにしては埋立地内の安定化が進まなくなるのでやってはいけないことになっているが、旧埋立地はまさにこの状況だと思う。ただ、浸出水量を少なくすれば、内部からの外部への影響を少なくすることができる。覆土は、浸出水量を少なくする一番の効果のはずだが、池の辺では浸出水量が減っていない。これでは、何のために覆土をしたのかわからないという話になるので、根本的な原因を探り、池の辺のキャッピングをもう一度考え直さないと、浸出水量を少なくとも 3 分の 1 くらいにしないと、覆土としての効果は薄いと思う。
- もうひとつ、浸透係数の分析結果の信頼性について、峠谷に利用した覆土の透水係数が至極小さく、普通ほとんど無いはずで、ベントナイトのようなシルトを使っても、 10^{-5} (10 万分の 1) から 10^{-6} (100 万分の 1) くらいであり、 10^{-7} (1,000 万分の 1) までは、ほとんど行かない。これは、現場透水試験ではなく、室内透水試験の結果であり、やり方が悪いと異常により係数を出すので、もしできたら現場透水試験をやしてほしい。もし、この透水係数が本当ならば、覆土工事後、ほとんど浸出

水がゼロに近くなるはずである。そういった意味でも、覆土の効果を正しく把握しないと、何のための覆土工事かわからなくなる。

なお、旧埋立地の問題（上部がアスファルト舗装されており、水が浸透しづらい状態であること）は、別に議論する必要があると思う。（梶山先生）

⇒ 透水係数の試験は、現場で覆土工事を施工したものに対してやってほしい。現場見学の時に、覆土内に小石や砂が見えた箇所があったが、あの状況では峠谷の浸透係数 10^{-7} は到底信頼できない。実際に現場で覆土したものがどういう状態にあるのかという試験をしない限り、室内試験の結果を出しても無意味だと思う。（関口先生）

7) 雨水調整池の底泥のダイオキシン類等の分析結果について

調整池を浚渫した後は、分析値が下がることは当然である。最初の浚渫前の土砂は、かなり長期間蓄積されたものであるから、浚渫後にまた溜まってくるということ自体が問題である。

むしろ、浚渫してから次に測定するまでの期間との間に見合ったものであるかどうか。一概に「低くなった」かどうかというのは、浚渫から浚渫前の期間を比較してみないとわからない。（梶山先生）

⇒ ダイオキシンや鉛がなぜ出ているかということころは、どこから流入していくかを見て行こうということを目的に測定してきた。その点からすると、位置 No. 2 が、ダイオキシン類濃度などの低下が鈍い。比率を見てみると、No. 1 から No. 3 まで、割と同じような下がり方をしている。だから、どこから流入しているかという調査は、これで充分かどうかという問題はあると思う。No. 2 の周辺が疑われる、そうすると、No. 2 から流入しているのは、池の辺の上流部からの雨水であり、堰堤の途中から出てくる水もあるだろうし、あるいは調整池の下から出てくる水の可能性もあり、調査には工夫が必要であると思う。（関口先生）

8) 雨水調整池の魚の分析について

同じ環境で育って、同じ魚種で同じ年齢の魚を分析しても、ばらつきがある。ものすごいばらつきがあるというのは、原因はよくわからないが、私の経験からすると、同じ多摩川流域に住んでいても、環境が少し違っていると、鉛の蓄積が違ってくるので、そういう意味では、相当たくさんのサンプルの分析をやらないと結論に近いものは何も出ない。事務局に予定を聞いたところ、雨水調整池の魚と鶴見川の魚を 1~2 検体くらいしかやらないという話だが、これでは何も結論がでないと思う。そういう意味で言うと、あまりにサンプル数が少ないのであれば、お金の無駄遣いになるから、止めた方がいいかなと思う。（梶山先生）

9) 雨水調整池の下流域（静水池）の底質のダイオキシン類と鉛のデータについて

2 回分のデータに変化が見られないが浚渫しているのか。（関口先生）

⇒ 同じ年に 2 回測定を行っており、条件としては同じである。（浚渫は行っていない。）（事務局）

10) 埋立ガス中のベンゼンの周辺環境への影響について

ベンゼンが微量だということは、前回第 7 回の協議会でも説明されたが、

一般の人が聞くと何かとんでもないものが出ているのではないかと不安が出やすいので、環境大気の調査を実施してみることは、ぜひ一度やっていただき、その結果を公表していただいた方が安心につながると思う。(委員長)

- ⇒ 漏れていないなら、漏れていないという結果をだしていただきたい。「漏れていないと思う。」では、心配である。安全な程度に漏れているのか、その結果を出してほしい。(委員)
- ⇒ 測定場所、測定項目、測定条件等、様々なものを考慮しなければならないので、時間をいただきたい。明らかにするという方向性は市としても考えていきたい。(施設建設担当部長)

11) 対策調査の検討について

昔の地形図を見ると、団地側からつながっている谷戸を埋めていることがわかる。団地側から川があったが、川を埋め立てて、道路を作って、その東側に作った最終処分場なので、当然、そこから水が出てきているだろう。そのため、私は団地内に井戸を掘っていただいたのはそういう可能性があるだろうと思ったのでのことである。データはだいたい想定したとおりであったので、もう1回お願いしたいところではあるが、団地内の井戸の水質調査はもういいので、MB No. 7の処分場側にもう1箇所、新規観測孔を掘っていただいて、水量の流れを調べてほしい。そうすると、だいたい水の流れがどれくらい動いてくるのかわかるから、MBNo. 7の向こう側に調整池があるので、水の流れが団地側から処分場側に来ているだろうと思う。峠谷は別として、池の辺に関しては対策を基本的に考えなおして、どうするのかということを考える時期が来ているのではないかと。そうしないと、ものすごいお金をかけて、調査をずっと続けていくことになってしまうので、見極めをするための用意をしていただきたいと思う。(委員)

- ⇒ 方向性を出す時期には来ているとは思いますが、まず、その前に、先ほどの覆土の透水係数の話が出たが、本当にこんな数字があり得るのかと疑問には思っている。しかし、分析結果なので、お出ししている。また、池の辺の浸出係数についても、実際の降雨では水たまりもでき、そのような場所で雨水排水がどう流れていて、そのくらい浸透しているかということ、流量計の結果だけでは判断しづらい部分もある。現地測定がよいのかはわからないが、いずれにしても材料試験(室内での透水試験)の結果、それと、池の辺の浸出係数の結果は、時間をいただき、もう一度確認させていただきたい。委員が言われた件については、方向性としては、過去に議論されたことも含めて検討したい。(施設建設担当部長)

12) 旧埋立地の埋立物について

「新埋立地も、旧埋立地にも、下の方に不透水層に近い層がある。」という説明があったが、MBNo. 18のボーリング調査結果(配布資料25頁参照)を見る限り^{***}、否定した方がいいと思った。地面から-14m付近にシルト質のようなものがある。しかしその下に、ゴムやプラスチックなどの種類の限られた産業廃棄物(以下、「産廃」)の不法投棄が見られたので、シルト質は人工で埋めていると思われる。その60~70cm上は、市の埋めた物(一般廃棄物。以下、「一廃」)で、有機物・生ごみが少ない。しかし、市が埋めた物を見ても、草や紙質のものがほとんど分解していないので、非常に分解しづらい環境である。それと、ほとんどプラスチ

ックで雑な入れ方をしてあるので、上から落とすだけで、転圧はしていないからすごく軽い。

それから、水質データ、とくにイオンバランスの変化を見て、処分場の遮水が事故を起こしていて、DS 1 層に汚染が行っていることを前提に対策を進めて行き、上からの水をどれだけ遮断できるかということが重要である。キャッピングの問題、それから覆土がどれだけ雨水を遮断できるかという問題は、もう少し精度を上げて調べないと、結局「やってみた」ということで終わってしまうのではないか。(関口先生)

※※梶山先生・関口先生には、協議会開始前に、ボーリングしたコアの現物をご確認いただいた。

- ⇒ 当処分場は一般廃棄物処理施設なので、産廃が必ず入っているかどうかはわからないとはご了解いただきたい。(事務局)
- ⇒ 産廃らしい入れ方をしている層が、一番下に 1m 程度あり、上層のごみと明らかに違うという点について注意して見ていただきたい。(関口先生)
- ⇒ 旧埋立地の方は昭和 45 年以前で、「廃棄物の処理及び清掃に関する法律」(以下、「廃掃法」)ができていないので、産廃と一廃の区別がない。廃掃法が適用される前の埋立地なので、今で言う産廃も一廃も単なる廃棄物として市町村が一括して処理していた時代なので、今で言う産廃に該当するものはあると思う。

旧埋立地の問題は、たぶん切り離して考えなければいけないと思っている。というのは、旧埋立地は、上が舗装され駐車場になっており、簡単に言うとキャッピングがかなりされている状態である。だから、ここに水が入ってこないから、安定化が遅れているだろう。安定化を積極的に進める必要があるのかということを考える必要があり、切り離して考えなければいけないのではないか。それと、「ベンゼンとか環境測定項目を考えさせて欲しい」と施設建設担当部長から話があったが、簡単に言うと、旧埋立地のごみが露出している付近で、たとえば環境大気を 24 時間採取、それから MBNo. 18 を開け放して、上の 1 ~ 1.5m くらいのところで採取、それくらいのことはやってみてはどうか。(梶山先生)

- ⇒ 環境大気は、どのようなことができるのか、検討していただきたい。(委員長)

13) 埋立地への流入水について

上をキャッピングしても、よそから水が流入すれば、水は埋立地内を通っている状態である。そのような状態が判明したとして、その次はどうするのか。どうしようもないのか、そのあたりはどうなのか。(委員長)

- ⇒ 上をキャッピングしても横から流入するものはある。しかし、少なくとも、上から入る水を防がなければならないので、その部分が劇的に減れば、トータルは全く違ってくる。いづれにしても、先ほどのデータを見ると、上からの水も防げていないということであるから、まず大きな問題であることは間違いない。横から流入する水が多いときには、防ぐ方法はいくつかあるが、例えば、いわゆる「バリア井戸」といって、汲み上げる井戸を間に掘ったり、それから「連続遮水壁」、これもおそらくここはそれほど深いものを作る必要はないと思われるので、流路がわかればだが、「TRD 工法」という一般的な方法で、その部分だけ遮断する方法、そういう方法は、安いものから高いものまでいくつもある。非

常に問題であるということがはっきりすれば、そういった対策をとっていくことになる。(梶山先生)

- ⇒ 埋立地内部に水がどんどん流入し、有害物質が溶け出して埋立地外へ流出すれば非常に問題であるが、浸出水がきちんと処理されていれば、それはそれでいいという気がするがどうだろうか。(委員長)
- ⇒ 降った雨を必要な量だけ浸透させるような覆土にしたい。それを確認する意味で浸透係数についてはもう少し調べて、現在の状態が本当にいいのか、この数字だけでは判断できない気がするので、もう少し精度をあげたい。(施設建設担当部長)
- ⇒ どれだけ入ってどれだけ出たかをバランスを見ながら、どういう対策をしていくのが適切かの判断をしていくべきである。理論上、完全にキャッピングできたという話は求めている。覆土の透水係数については室内試験だけでは不十分である。(関口先生)
- ⇒ 現場透水試験については、施工後にボーリング孔を使った透水試験を実施してほしい。これが、最も正確な透水試験である。(梶山先生)

14) 生物への鉛の蓄積について

鶴見川のほうの検体は魚でなく、移動しないのでタニシを選んでもらいたい。川の検体を増やしてほしい。(委員)

- ⇒ 上流と下流で比較したいと考えていたが、環境大気を優先するというのであれば、環境大気測定を先にし、魚についてはもう少し検討させていただければと個人的に思っている。(事務局)
- ⇒ 効果の出る方をぜひお願いしたい。ただ、長期的には、生物への蓄積度の調査は組み入れていただきたい。(委員長)

15) モニタリング調査計画の効率化について

いつ実施するのか実施時期について具体的な記載がない。例えば地中温度のデータの取り方について、年2回しか測定しないのにも係らず同じ月でデータを取っていない。効率的なモニタリング計画にしてほしい。それから、MB No.7の地下水の測定は、私も入れてほしいと思う。(委員)

- ⇒ 今年は春夏秋冬で測定する計画としている。去年は新規井戸設置工事が遅れた関係で夏場に続いてしまった時期もある。(事務局)

16) 新規モニタリング井戸の設置について

MB No.7の横(処分場側)に、掘削してほしい。(委員)

- ⇒ 新たにモニタリング井戸を掘るとするのは、目的、掘り調査することによってどのような効果があるかまで踏み込んで考えなければいけないと思っている。そこだけではなくて、最終処分場周辺全体のことを考えなければならぬので、そこを掘りますということではなく、トータルで考えた上で、方向性として場所等の選定をしたいので、お時間をいただきたい。(事務局)

(4)今年度のスケジュールについて (事務局)

- ・ 次回の保全協議会の開催は8月の予定。
- ・ 工事の方は、旧埋立地のむき出し部分に、防草シートを敷設し、崩落防止対策を考えている。複雑な地形で、木や草も生えているので、排水処理についても検討を進めながら工事が必要になる。また、調整池の浚渫については、データの分析を踏まえ、内部調整を行い、やる必要がある

のかも含めて、考えていきたい。

4. その他

(1) 4月3日の暴風雨の影響について (事務局)

4月3日に爆弾低気圧という、あまり例を見ない暴風雨が発生した。調整池の浚渫のために水を抜いた状態であり、調整池のブロック積みの裏へ水が侵入し、砂基礎の砂まで下に漏れ出した。原因等は推測であるが、砂基礎の上にブロックを載せただけの構造のため、水が貯留されていない状態の時に水がブロックの裏に浸入して、崩落したのではないかと考えている。

対策については、調査の準備をしていて、速やかに補修を行う予定である。小堰堤の横に水が集まって覆土の法面が崩されてしまっている状況もあり、覆土のキャッピング等も踏まえて調査を進め、対応については検討していく。これは、今年度のスケジュールに入っていなかったが、対策工事として検討している案件である。

(2) 資源循環課からお知らせ

昨年度に廃棄物処理法が改正された関係で、維持管理に関する計画と記録をホームページ等で公開することが義務付けられた。そのため、資源循環課が維持管理の計画をホームページに載せている。維持管理の基準というのは、この協議会で協議しているモニタリング計画などの一歩手前の内容であり、基本的には、これまで実施していたことを明文化しているので大きな変更は無いが、「管理体制」としては、組織が変わって、所管が変わっていることがある。水質に関しては、省令で定められている基準値を満足しており、その結果をホームページにあわせて更新していく。町田市のホームページにある「環境・ごみ」の「資源とごみ」の「計画・統計・資料など」に載せているので、見ていただければと思う。

5. 閉会

以上